

映画『いまダンスをするのは誰だ?』自主上映会のお知らせ

厚生労働省推薦映画

パーキンソン病のミュージシャン 樋口了一 59歳 俳優初挑戦！
（「水曜どうでしょう」テーマ曲、レコード大賞優秀作品賞受賞）

日時：2024年12月15日（日）2回上映

① 1回目：10時～12時

② 2回目：13時～15時

場所：札幌市社会福祉総合センター4階視聴覚室

札幌市中央区大通西19丁目1-1

地下鉄東西線 西18丁目駅下車

（出口1番）



定員：いずれの会も50名まで。

参加費：無料

申し込み：パーキンソン病友の会 北海道支部 札幌ブロック事務局

Tel 080-5592-5359（松田）

* 事前申し込みが必要です。9月30日までにお申し込みください。



パーキンソン病に限らず、難病と診断された時の切ない気持ち。年数が進むにつれ、できなくなったことも増えてきて、仕事も失ったり出口の見えないトンネルに迷い込んだような気持ちになることもあります。

でも、難病だから不幸なのではないのです。諦めることさえしなければ一筋の光を見つけることができるかもしれない…。

この映画は単なるサクセスストーリーではありません。難病であるなし関係なく、すべての人に「一度きりの人生、諦めることはもったいない！何かに挑戦する気持ちを持ち続けて欲しい」とまさに映画の中のセリフにある「諦めることを諦める！」なのだと思います。



主催：全国パーキンソン病友の会 北海道支部 札幌ブロック

出演: 樋口 了一 小島 のぞみ 山本 華菜乃 塩谷 瞬 IZAM 吉満 寛人 渋谷 哲平 新井 康弘
椿 鮎子 むかい 誠一 岡村 洋一 森 恵美 西田 聖志郎 澤田 拓郎 あべみほ 静 恵一 今安 琴奈 杉本 彩

監督・脚本・原作:古新 舜 (「あまのがわ」「ノー・ヴォイス」)

企画・原案:松野 幹孝 **エグゼクティブプロデューサー:**古新 舜 **協力プロデューサー:**野村 展代、小川 順也、師尾 郁 **ラインプロデューサー:**赤間 俊秀 **撮影監督:**篠田 力 **音楽:**樋口 了一、村上 ゆき **照明:**渡辺 大介 **録音:**加唐 学 **美術:**本間 千賀子 **スタイリスト:**吉田 摩奈美 **ビューティーディレクター:**ビューティ★佐口 **助監督:**宮本 亮 **編集:**古新 舜 **カラーグレーディング:**稲川 実希 **VFXスーパーバイザー:**渡辺 輝重 **整音:**岩波 昌志 **医療監修:**師尾 郁 **PDダンス監修:**マニシア **ダンス振付:**相沢 香 主題歌「いまダンスをするのは誰だ?」樋口 了一 (テイチクエンタテインメント)

製作:いまダンフィルムパートナーズ **制作:**コスモボックス 配給:アークエンタテインメント

協賛:ウチダシステムズ 市進ホールディングス 森下仁丹 新しい贈与論 美浜神経内科 住友ファーマ エフピー
ボストン・サイエンティフィック ジャパン Medtronic PARKINSON Laboratories 日本みらいキャピタル
サンウェルズ 夢ふおと アートオフィスクリエイト サンソウシステムズ キヤノンマーケティングジャパン
後援:日本神経学会 日本神経治療学会 日本パーキンソン病・運動障害疾患学会 (MDSJ)
東京都医師会 千葉県医師会 千葉市医師会
協力:PD 就労促進プロジェクト実行委員会 鹿児島県PR観光課 PD Cafe 服部 信孝 松野 裕

2022年/日本/カラー/5.1ch/115分/ ©いまダンフィルムパートナーズ

実話から生まれた希望と再生の物語

パーキンソン病の当事者による主演劇映画は日本初。原案も当事者。

「水曜どうでしょう」のテーマソング「1/6の夢旅人2002」や、「第51回 日本レコード大賞」優秀作品賞(2009年)を受賞した「手紙～親愛なる子供たちへ～」で知られるシンガーソングライターの樋口了一が、俳優初挑戦した映画『いまダンスをするのは誰だ?』(古新舜監督)。

仕事一筋で家庭を顧みなかった主人公がある日、40代で若年性パーキンソン病と診断されたことで出会った人たちや、「ダンス」を通じて自らの生き方を見つめ直していくストーリー。

本作の発起人の松野幹孝さんは証券マンとしての働き盛り2012年、パーキンソン病と診断された。病気の実情が知られていないため、孤立し苦悩した。その実話をもとに原案を作成し、孤立から救い、病気を知ってもらうため映画化に奔走した。2022年3月、クランクイン直前、息を引き取った。享年67歳。

樋口自身も、2006年頃からギターが弾きにくくなり、声が出しづらいつつ体の不調を感じ始め、その原因がパーキンソン病だと2008年に診断されているが、現在も定期的にライブを行うなど、故郷の熊本を拠点にパーキンソン病と闘いながら音楽活動を続けている。本作公開時59歳、撮影時は58歳。パーキンソン病当事者が主演する劇映画は日本初となる。

今回、自身初となる映画主演を務める樋口了一は、「難病の中年サラリーマンの、みっともなくてなりふりかまわない真っ直ぐな気持ちを込めた人生というダンス」と見どころを語った。

樋口を役者として主演に起用した古新 舜（こにいしゅん）監督は、「生活のリアルな仕方や、仕事での苦労、自分との葛藤。パーキンソン病当事者の樋口さんだからこそ表現できる表情や心の声を臨場感あふれる演技で披露されています」と語った。

脇役には、ダンスインストラクター役に杉本彩、上司役に塩谷瞬、パーキンソン病仲間にIZAM、渋谷哲平、社長役に吉満寛人、顧客の病院院長役に新井康弘ら実力派俳優が集結。

●ストーリー

功一は仕事一筋人間で生きてきたが、家庭を顧みず、妻とはすれ違いが続き、娘とも仲が悪かった。ある日、若年性パーキンソン病だと診断されるも、それを受け入れられず、一人孤独を抱えてしまう。職場でも仲間が離れていく。そんな中、パーキンソン病のコミュニティ「PD SMILE」に通い始める。友人が出来、本音を話せるようになり、人とのふれあいの大切さと痛感する。料理にもチャレンジし食生活も改め、不仲だった娘ともダンスを通じて、お互いの関係が改善されていく

●パーキンソン病とは

パーキンソン病とは中脳の黒質のドーパミン産生細胞が減少することにより、寡動（動きが遅く少なくなる）、筋強剛（筋肉が固くなる）、振戦（ふるえ）、姿勢調節障害などの症状をきたす疾患です。上記のような運動症状に加えて、非運動症状として、便秘や起立性低血圧などの自律神経障害、むずむず脚症候群、嗅覚障害、抑うつや幻視などの精神症状を合併することも知られており、しばしば運動症状の前駆症状として出現します。日本の有病率は10万人に対して100～300人程度です。（日本赤十字社医療センターより引用）

パーキンソン病当事者の出演に関しては、映画では『走れウイエ走れ』（スウェーデン、ヘンリック・シュツフェルト監督）、ドラマではマイケル・J・フォックスがパーキンソン病の弁護士を演じた「グッド・ワイフ」、ドキュメンタリーでは『熱狂宣言』（奥山和由監督）がある。

主演 主題歌 橋口アツ

■プロフィール

1964年2月2日、熊本県熊本市生まれ。シンガーソングライター。1993年「いまでも」でデビュー。2003年「水曜どうでしょう」のテーマソング「1/6の夢旅人2002」をCDリリース。08年「手紙～親愛なる子供たちへ～」をリリース、09年手紙を届ける無料ライブ“ポストマンライブ”スタート、同曲で第51回日本レコード大賞 優秀作品賞などを受賞、現在も全国の介護施設ではバイブルとして親しまれている。一方でSMAP、中島美嘉、郷ひろみ、石川さゆりなど楽曲提供も多数手掛けコンポーザーとしても活躍している。

06年ころからギターが弾きにくくなるなど異変を感じ、14か所の病院へ行くも原因が分からなかった。08年パーキンソン病と診断される。現在は病気と向き合いながら、活動を続けている。

■コメント

見どころ：難病の中年サラリーマンの、みっともなくてなりふりかまわない 真っ直ぐな気持ちを込めた人生というダンスを是非ごらんください。

主題歌に込めた思い：監督が書かれた歌詞が、若々しい息吹に満ちていたので、若かった頃のエネルギーをもう一度盛り込みたいと思って作りました。多分自曲の中で1番テンポが早い曲だと思います。撮影で大変だったこと：薬を飲む配分とタイミングに苦労しました。

病気の治療、歌手活動、病の啓発活動、そして日々の暮らし：故郷の熊本に生活の拠点を移して12年が

経ちました。やはり、その中で日々向き合っている自分の抱える病からインスピレーションを受けて作る曲が増えたように思います。

監督・脚本 樋口 誠

■プロフィール

映画監督・ストーリーエバンジェリスト。「Give Life to Your Story!—物語を動かそう!—」をテーマに、映画と教育の融合を通じて、大人と子どもの自己受容感を共に育んでいく共育活動を行なっている。犬猫の殺処分問題をテーマにした『ノー・ヴォイス』(2013)、心を無くした女子高生と分身ロボット“OriHime”との交流を描いた『あまのがわ』(19)という形で、社会課題をテーマにした作品を発表し続ける。同作は、第31回東京国際映画祭「特別招待作品」として選定され、海外6つの映画祭でノミネート、ロサンゼルス JFFLA では「最優秀脚本賞」を受賞。「日本映画ウィーク 2021 in ホーチミン」で日本代表の1作品として上映される。本作では、監督・脚本・製作のほか主題歌の歌詞も手がける。研究・教育活動としては、文化人類学の視座をもとに、VUCA 時代を生きる上で必要なマインドを、学生から社会人まで、わかりやすく発信し続けている。コスモボックス株式会社代表取締役、北陸先端科学技術大学院大学博士後期課程在籍。

■コメント

樋口さんについて：生活のリアルな仕方や、仕事での苦勞、自分との葛藤。パーキンソン病当事者の樋口さんだからこそ表現できる表情や心の声を臨場感あふれる演技で披露されています。

身近で当たり前の存在だからこそ、つつい蔑ろにしてしまい、コミュニケーションを欠きがちの家族という存在が、自分の気づかないところで生活を支えてくれている。樋口さんは自然体の演技で、家族の愛の大切さに気づいていく表現をしてくれています。

パーキンソン病について：職場でも家庭でもパーキンソン病のことを告白できず、孤立してしまう方もいます。この病気の認知を広め、社会で取り残される人を減らしていき、職場や家庭においての両立支援を行う手がかりとして、パーキンソン病の方と社会との架け橋を作りたいという想いで、この作品を制作しました。

石安 松野幹孝

■プロフィール

1954年千葉県出身。証券会社勤務中、2012年パーキンソン病と診断される。病気の実情を知ってもらおうと、映画化を発案、2019年退職後、原案を作り、具体的に映画化に向かって奔走した。2022年3月、クランクイン直前、息を引き取った。享年67歳。

●コメント 松野氏長男 松野裕氏

寡黙でおとなしい父が、ある日急に「映画をつくろうと思っているんだ」と言った時の大きな変化への驚きを覚えています。

映画の中で、「私たちは、I am パーキンソン病ではなく、I have パーキンソン病。特徴のひとつなんだよ」というセリフがあります。

父は“難病”という特徴を得て、多くの素敵な仲間を得て、前向きで活動的に変わっていきました。

この映画を観て初めて、家族すら分からなかった“難病の当事者”として”人生の当事者”としての葛藤とその先の変化を理解することができた気がしました。

この映画が1人でも多くの人に届くことを祈っています。

●応援コメント

順天堂大学 医学部 脳神経内科 教授 服部 信孝

パーキンソン病は進行性の難病ですが、一方で対症療法が可能な疾患です。日本にはおそらく20万人以上いると推定されています。治療は数年ごとに改善されていますが生活の質を考えた場合、十分満足のものとは言い難いのが現状です。加えて日本社会のこの疾患に対する理解も十分とは言えません。

「いまダンスをするのは誰だ？」の映画作品は一人のサラリーマンが、この疾患の偏見を払拭したい思いから計画されたもので、企画した当本人は今は天国からこの映画の封切りを心待ちにしていると思います。一人でも多くの方が、この映画を観て病気の本質を理解して頂ければと切に願っております。服部 信孝

●応援コメント

美浜神経内科 院長 師尾 郁

15万人から20万人のパーキンソン病患者のうち1割が就労世代であるといわれています。就労世代のパーキンソン病患者は、疾病の受容、家族関係における葛藤、職場での理解獲得、社会生活におけるトラブルなど、さまざまな困難を抱えています。物語では、仕事一筋の中年男性が、さまざまな経験を通じて自己を見つめ直し、気づきを得て成長していく姿が描かれます。周囲の人々も難病の患者さんを受け入れ、インクルーシブ社会(共生社会)を築いていくストーリーが、心温まる映画として描かれています。

公式サイト <http://imadance.com>

公式 twitter https://twitter.com/imadan_movie

公式 FB <https://www.facebook.com/imadanmovie>

映画『いまダン』公式サイト <https://imadance.com/home/>

配給：アークエンタテインメント©2022 いまダンフィルムパートナーズ

<お問い合わせ>コスモボックス株式会社

166-0002 東京都杉並区高円寺北 3-1-9 青田ビル 201

info@cosmobox.jp / 03-6321-7368